

皆さん、自分の妻を何と呼んでいるんですかね。いえいえ、私が言っているのは、二人だけの時のことではありませんよ。。そんなこと、名前を呼んでも「オマエ」でも「オイ、コラ」でもいいわけです。悩むほどのことではありません。しかし、二人称から三人称、私が他の人間に対して、自分の妻の事を指して言う時のことですが、これはそう簡単ではありません。「私と妻との関係」に合うような、適切な単語が見つからないのですよ。このコラムの中でも、「妻」と書いたり、「細君」と書いたり、時に「女房」という言葉を使用しています。しかし、「文章の中ではこうしかないのかな」と思いつつも、日常会話で使うとなると、適当な言葉がありません。どんな単語を使っても、何かシックリとしないし、違和感を覚えるんですね。

「妻」も「細君」も日常会話の中では、使いにくい言葉ですよ。特に細君というのは、夏目漱石の小説の中で使われるのはいいとしても、私には「似合わない言葉」という感じがします。これは正式には親しい人に自分の妻を指して言う時や、同輩以下の人の妻を言う場合に使用するようです。「女房」という言葉は「世話女房」などと使われ、庶民的でいい言葉です。しかし、語源的には、宮中で房(部屋)を与えられている女官を指す言葉のようで、あまり自分の妻に使うのはそぐわない感じです。しかし、友人と話す時などには、「女房」という言葉を使うことが、私の場合はかなり多いようです。他にいい言葉が見つからないので仕方なく使っているという感じがすかねえ。



他の人と話していると、「奥さん」というのも聞きますね。「ウチのオクサンがね」という感じがですね。何か語感的にキドツタ感じがして、私は使えないです。江戸時代に大名の妻を「奥方」、旗本や御家人の妻を「奥」と呼んだようですが、その流れの中で出来た言葉でしょうね。一般庶民には似つかわしくない感じがすな。「嫁」とか「ヨメはん」という言い方をする人もいます。「ウチのヨメはん、ようガンバっとるわ」という感じがですか。これも、配偶者の親の立場で使うのならいいでしょうが、ダンナが使うのはおかしいと思うのですよ。「オカアサン」とか「カアチャン」というのも、子供の側で使うのならいいとして、会社で使うとオカシイですよ。特に私のように、自分の母親が側に居る家庭では使えませんね。



少し変わったところでは、「ツレ」という言い方を聞いたことがあります。これは「連れ添う」の略ということなのでしょうが、「夫婦となる」という意味もあり、ちょっと気障っぽいですが、いい感じの言葉です。しかし、私のような場合は使えないのですね。それは私が自分の妻に「家内」という言葉を使えないのと、同じ理由からなのです。専業主婦で家事と育児に専念して、よく言うことを聞いてくれる「従順な妻」であれば、「ツレ」も「家内」も使えます。しかし、私の妻のように、「家の内」ではなく「外の世界」で、男と対等に

長年仕事をしてきたという自負をもっている女性に対して、この言葉は全く似合わないと思うのです。ちなみに、私の妻は他の人間に対して、私の事を言う時に「主人」という言葉を使いますが、「それ誰のことや?」という感じがですね。私はこの言葉を妻が発した時にいつも心の中で呟くのですよ。「全然そう思っとらんくせに、よう言うわ」

私の学生時代の友人は、自分の妻の事を「あの人」と呼びます。彼の妻が側に居る時は「この人」です。この呼び方はかなりの少数派でしょうね。私は彼と話していて、この言葉を聞いたたびに違和感を覚えます。妻の存在を認めて尊敬しているように思えて、どこか「他人行儀」で、距離をおいている感じがするのですよ。今度会った時に、改めて彼の「意図」を聞いてみたいと思いますね。作家の五木寛之氏が、何かのエッセイの中で自分の妻のことを「配偶者」と書いていましたが、「あの人」と同様に、日常会話の中で使うには間違っていないけど、「不自然な雰囲気」の言葉だと思うんですよ。

こうしていろいろと考えてみると、日本語というのは難しいと思います。英語では「YOU」の一言で終わることを、「オマエ」「アナタ」「キミ」「ワレ」「ソッチ」「アンタ」「オドレ」「ワリヤア」etc,.....いささか品のない広島弁を含めて際限がありませんよ。外国人が日本語を習う時に戸惑うのは無理ないと思いますね。私達日本人は、その時の人間関係と状況と雰囲気によって、無意識に使い分けをしているという事でしょう。

以前「刑事コロンボ」というアメリカのTVドラマがありましたね。もちろん日本語の吹き替えがしてあるのですが、この中で主人公の刑事コロンボが自分の妻を「カミサン」と呼んでいましたね。これは当時話題になりましたから記憶に残っている人も多いでしょう。おそらく英語では「MY WIFE」(マイ ワイフ)と言っているだけなのでしょうが、この訳を「私の妻」としないで、「ウチのカミサン」としたところで、この男のもつ雰囲気が生まれ、このドラマの面白味が出たのではないかと思うんですよ。ヨレヨレのコートを着た一見サエナイ刑事を演じた俳優(ピーター・フォークだったかな?)の演技もさることながら、翻訳者と声優(小池朝雄だったかな?)もドラマのヒットに一役かったということでしょうかね。こんなふうにと考えると、日本語の使い方は難しいですが、実に豊かな表現世界をもつ言語であるとも言えますね。

それにしても「カミサン」という言葉は、なかなか味わい深い単語です。これは江戸時代は武家の「奥方」に対して、庶民が妻の呼び名として使った言葉のようです。漢字を当てはめると、「上さん」なのか「神さん」なのか、「守さん」なのか、判然としませんが、一応あがめて、どこかで頼りにしている、という感じはうかがえます。私の妻を呼ぶに問題はなさそうで、これから使ってみますかね。この単語には、「強い女房」とか「カカア殿下」、という意味合いも含んでいる感じですが、これも実態に近いので仕方のないことですよ。

ところで、ウチのカミサンの話ですが、実はいろいろと困ったことがあるんですよ。もう結婚して37年になりますし、これだけ長く夫婦をしておれば、「以心伝心」という言葉のように、何も言わなくてもお互いが分かり合えると、よく言いますよね。しかし、私にはカミサンが考えていることが、今もってまるでわからないのです。ここでいうのは性格とかいうことではなく、「何を考えているのワカラン」ということなのです。私はアタマがワルインですかねえ。



「コイツ一体どこに行ったんじゃろ」ということがよくあります。ハウスの中での作業を終えて、昼食をとるために家に戻ってみると、もぬけのカラ。声をかけても返事はいきません、車はあるから出かけた様子はない、こうなったら現れるまで、ジッと待つしかありません。待つこと30分あまり、自転車で息を切らせたカミサンが帰ってきますー「モヤシがないんで買ってきたんよ」。時には二階

の天井裏から下りてきますー「人形を探しとったんよ。もうそんな時間？」。またある時には、家の裏から出てきて、「陽が蔭ってきたんで、草取りしとったんよ」……すべてがそんな調子なのです。私は勘がニブイということなんですかねえ。

売り場の広いスーパーやホームセンターに行くと、必ずと言っていいくらい「行方不明」状態が起こります。「10分後にここで会おうね」お互いに興味のある売り場が違うのですから、これは仕方ありません。しかし、その後が問題なのです。10分後、20分後、カミサンは現れません。30分を過ぎると、私もシビレを切らして、店内を探し始めます。そこに携帯の呼び出し音、「どこにおるん？決めた所におらにゃあダメじゃん！」ずい分と身勝手な話ですが、本当です。ここで、賢明な読者はこう考えるでしょうね。「おまえが先に携帯をかけりゃええんじゃないか」

全くその通りなのですが、じつはそれが出来ないのですよ。カミサンの携帯は「呼び出し専用」、ほとんど通じる可能性はありません。つまり、自分が掛ける必要のない時は、電源を入れていないからなんですよ。加えて、旅行にでも行くとき以外は、時計をもつ習慣がありません。何故って？よくわかりませんが、携帯や時計で、自分が拘束されるのがイヤなんじゃあないですかね。本人はそれで幸せなんでしょうが、まわりの人間は困りますね。なにかんづく、いっしょに暮らしている私は大変ですよ。



「ワリヤ、ええ加減にせえよ！オマエのようなバカとは暮らせんワイ！」などと、キレて怒鳴りつけることもありますね。そうでもしないとストレスが溜まってしまうのですよ。カミサンの反応は大抵は無視。自分の非を認めて謝るとか、反省して携帯の電源を入れるなんてことは、絶対にありません。逆切れして、反撃もありです。「それって、誰に向かって言ってるの？ワタシの目を見て、もうイッペン言える？」こうなふうに居直りをされると、どうにもカナイマセンよ。

私はカミサンの「悪口」を言っているのではないのですよ。考え方の「発想」が大きく違うのではないかと、ということなのです。これまではそれほど感じませんでしたね。昨年9月に、妻が雇用延長で勤めていた会社を退職して、いっしょにいる時間が長くなってからトラブルが多くなりましたね。イチゴ栽培をやっていると、二人でやらないと効率の悪い作業もありますから、手伝いを頼むことがあります。わりと快くOKするのですが、その後が問題です。仕事の要領を教えて、作業にかかると必ず一言ありますね。「これって、こうした方がいいんじゃないの」(またかいの！)という感じで腹が立つんですよ。「ワシは今までこうやってきたんじゃけえ、このやり方でエエのよ！文句があるんならやらんでエエわい」……一人のほうが心安らかに仕事ができる、というもんですよ。

前回のコラム(2016イチゴ栽培)で書いていますが、強風被害のようなトラブルに遭った時に、カミサンのような「しろうと」の考えが役に立つことはあります。しかし、それはマレなことであって、経験のない者が口出して、それが正しい事として通用することは大抵はありませんよ。この手の「自信家」がどこの会社にもいます。良く言えば「独自の発想のできるユニークな人材」になるのですが、「経験もないくせに自分の意見を主張する困り者」ということもありますね。

「ウチのカミサンが大のネコ嫌い」という話は、以前「コラム45: 犬の気持ち」でも書きました。私は心ひそかに、妻の「前世」はネコではないのか、と疑っているのです。血液型 AB のネコというわけです。じつに良く似ているのですよ。気持ちがのるとナツイテくるが、機嫌がノランとプイッと知らん顔。気分屋で自己中心で、マイペースの生活スタイル。ネコを見ただけで、「殺したるー！」と怒鳴りつけるのは、前世でトラブルでもあったんじゃないですかね。

ある時に思い切って聞いてみました。「おまえはネコじゃあないのか？」すると彼女はなにを今さら、と言いたげな表情で、サラリと答えましたね。「何言うとるん。ワタシはネコじゃなくてトラ！」……そういえばカミサンは寅年でしたよ。

「ツマらん話はナンボでもあるんじゃが、これくらいでヤメとかんとイケンワイ。これを読んでホンマに、おらんようになったらエライことじゃけえ」



◎今回の写真は、鞆の浦の風景のみを使用しました。